

# 古典ヘブライ語文法研究における 小辞 'et の統語論的位置づけについて

三 上 宗 一

0.

古典ヘブライ語においては、動詞の目的語が何らかの限定を受けている場合、その主要部名詞の直前に 'et という小辞が付加される。この小辞の機能については従来より多くの研究者の関心が注がれてきたが、それは一つには、これが限定された目的語にしか付加されないという、ある意味で他の前置詞にはみられない分布上の特異性を持っていたためであり、他方では、そのような目的語表示、あるいは対格表示<sup>1)</sup>としての「通常の」用法からさらに逸脱した用法の例、すなわち文法上の主語と思われる要素に付加された例がごく少数ながら見出されることにもよる。これらの用法をいかにして統一的な形で説明づけるかが従来からヘブライ語学における大きな課題となってきたのである。そのため多くの研究においてはそのような少数の逸脱用法の分析の方により多くの紙数が割かれている。以下、まずはこの小辞の統語論的機能に関する諸見解を年代順に概観していくが、その際、この逸脱用法の詳細はそれらの諸研究に譲ることとし、本稿では少し視点を変えて 'et の持つ本来の「目的語表示」あるいは「対格表示」としての機能そのものに焦点をあてていく。従来の研究において、目的語ならびに対格という概念は、用語上の問題もあってともすれば混同されがちであったこともあるが、それに加えて、それらを「表示する」ということの意味に関しても検討が必要と思われるからである。

1.

まず、Wilson(1890)は 'et の起源とその機能との関係に関して次のように述べる。

et may originally have had an intensive or reflexive force. From the analogy of language, we should expect as much. But whatever its original force, it came to be used merely as a sign "to call attention to what was already direct and definite." (p.143)

このように 'et の起源を強調あるいは再帰的要素（「～自身、自体」）に求め、それが後に単に「すでに直接的directで定であるものに注意を喚起する記号」として用いられるようになったとする考え方は、これ以降の諸研究においても細部の違いはあるものの共通し

て見られる説明原理である。ここでは 'ē が強調の力を失った結果定の直接目的語の表示としての機能に落ち着いたように書かれているが、個々の用例の分析では強調の意味が保たれているように説明づけている箇所もあり、直接目的語表示としての機能と強調の機能との関係については不明確な部分もある。なお 'ē が直接目的語 Direct Object でなく主語 Subject を表示している場合においてさえも、Wilson はそれら 'ē が付加された要素を全て対格 Accusative と呼んでいる<sup>2)</sup> ことから、彼は 'ē を対格表示と同一視していたことがわかるが、直接目的語と対格表示との分布のずれに関して特にその理由を説明しているわけではない。'Accusative' は形態論的概念であるとして、'Object' および 'Subject' をどういう概念ととらえていたかについては一考を要する。

ところで、この中では 'ē は一貫して小辞 particle として言及されている。他の前置詞との機能的相違については明記されていないが、とにかくこれを前置詞とは呼ばず、区別して別個のカテゴリーに属するものと考えているのは確かなようであり、それはこれ以後の他の諸研究においてもかなり一貫して受け継がれている。

次に、Gesenius-Kautzsch (1910) はこの小辞を起源的には 'essence, substance, self' の意味を持つ実詞であったとみなし、それが後続する名詞や接尾辞と construct state において結合することによって、ラテン語の ipse やギリシャ語の autón のような代名詞の意味を表していたとしている。もっとも、通常の用例においてはそのような意味はすでにほとんどなく、単に限定された目的語を導入するのに用いられていたにすぎないともいう。彼によれば、名詞に対格 accusative を明示する必要は格語尾が完全に消失した後にはじめて生じたはずであり、それも当初はおそらく動詞に先行する目的語のみに限定されていたであろうという<sup>3)</sup>。 'ē はまずその環境で対格表示 nota accusativi として機能し、それからその他の位置へと使用が拡大していったということである。一方、主格 nominative を導入しているとされる用例については、それが後期の書に集中していることから、もとの実詞の意味と結びつけることには否定的である。

Joüon (1923) は、この小辞の起源をやはり 'chose' (物) という意味を持つ実詞に求め、語根 דָּרַשׁ (désirer) と関連づけている。細かな点での違いはあるが、本来の意味を失った結果文法機能の表示に転用されたという説明は Gesenius-Kautzsch と共通している。また受動文における用例については、非人称受動の動詞形がどうかして他動性を保持したためではないかという、ある種の構文の混肴が生じた可能性を示唆している<sup>4)</sup>。

## 2.

Albrecht (1929) は 'ē の起源については Gesenius-Kautzsch 等と同様の見解であるが、考察の対象を主として文献などですでに主格 Nominativ 及び受動文 (の主語) における用例として引用されたものに限っている。彼はこのうち主格表示とされた用例については、いずれもテキストそのものの修正を含め、他の説明が可能として退けているが、受動文に

おける用例については、特に動詞 yālad (bear, beget) の受動語幹（ニファル、プアル、ホファル等）が 'et 句を支配している用例、並びにその他の動詞の受動語幹の、とりわけ不定詞が 'et 句を支配している用例、に限って考察している。（それ以外の用例についてはやはり他の説明が可能として退けている。）このうち不定詞句における用例について、彼は Lagarde の見解を引用している。それによるとこれはラテン語やギリシャ語におけるいわゆる不定詞付き対格と比較することができ、またアラビア語の動名詞 darbun が「打つこと」だけでなく「打たれること」をも表すことができることなどから、態 Genus Verbi とは無関係であるという。一方、動詞 yālad における用例については、いわゆる一夫多妻制度との関連を Ewald の名をあげてほのめかしているにすぎず、これについては若干説明不足の感が否めない。

Brockelmann (1931) は、受動文の主語が対格表示を取るという現象が非セム語を含め、他言語にも見られる現象であることを指摘し<sup>5)</sup>、上記の Albrecht がこれをヘブライ語内部での特異性として処理した点を批判している。

Blau (1954) もこれらの見解を受け、主格 Nominativ における用例を分析している。彼も Albrecht 同様、主格表示の機能を認めることには懐疑的であるが、Albrecht がそれを多くはテキストそのものを修正することによって示そうとしたのに対し、彼自身はそのような修正を極力避け、'et の通常でない使用を引き起こしたその背後の要因を探ろうとした点が異なっている。彼によれば、例えば先行節の影響や、他の構文からの類推や混淆など、いくつかの要因が働いたため、あたかも文法上の主語が対格の目的語であるかのように感じられたのがその原因であろうという。彼の関心は動詞や前置詞の支配関係などの文法的な問題に集中しており、他の研究のように「強調」といった概念に頼った説明をおこなっていない点が注目される。

### 3.

それに対して Walker (1955) は、動詞 yālad の受動語幹の例を引用し、'et が主格に先行していることは明らかな上、'et が対格表示であるという見解そのものを破棄すべきであると主張している。彼によれば、'et は主語だろうと目的語だろうと係わりなく後続名詞を「強調」する小辞であるという。彼は次のように述べる。

Since in many sentences the action moves from subject to object and the latter, if definite, is the new focus of attention, it takes the emphatic particle, 'eth before it. If, on the other hand, emphasis is laid on the subject, this takes the emphatic particle. (p.314)

ここでは「強調」emphasis という概念は、話者の関心の焦点と関連付けられていることが明らかである。そのため、'et は意味関係にも文法関係にもよらず、多分にプラグマティックな要因によって使用を条件づけられていることになる。彼の主張はあまりに荒削りで

十分な論証にも乏しいものであるが<sup>6)</sup>、以降このような考え方は広く見られるようになっていく。

Saydon(1964)もこの流れにそった主張を展開し、'ēṭの全ての用例を強調の機能によって説明づけようとしている。彼は'ēṭの起源に関しては他の研究と同様にアラビア語の小辞 iyyā と関連づけているが、彼はこれを直接の起源としてここから\* ahという形を想定し、これが接尾代名詞を取って、例えば'ōṭiなどの形が生じたと考えている。そして上述のGesenius-Kautzsch の説などを引用しながらこの小辞が英語の -selfの語尾を持ついわゆる再帰代名詞のように主語であれ目的語であれ後続名詞を強調する機能を持っていたと結論づけている。もっともアラビア語では iyyā は代名詞とのみ用いられ、強調の機能についても実際に有していたという確証はないので、この語源解釈は必ずしも強調の機能の説明を支持しているとまではいえない。

彼はまた、この小辞が限定determination を受けた名詞句にのみ付加されるという事実を重視し、強調と限定の間に密接な関係を認めている。つまり限定された名詞句はそれゆえに強調的emphaticであり、非限定の名詞句はそれゆえに強調的でない、という考え方である。この場合、強調という一種プラグマティックな概念と、限定という統語的な概念とが半ば強引に結びつけられているという印象は禁じえないが、ともかくも従来から基本的機能として認められてきた格表示としての機能はこれにより付随的、派生的なものとして退けられ、限定性に基づく強調という概念によって全ての用法が統一的に解釈しなおされる結果となったのである。

#### 4.

これらの研究に対しHoftijzer(1965) は、従来の研究がみなヘブライ語に格体系が存在するという暗黙の前提の上に成り立っていたと指摘し、まずこの前提そのものを再検討する必要があると主張した。確かにヘブライ語においては既に名詞の格語尾は消失し、格関係を表示する形態論的手段に欠けている。そのため彼はまずセム語でそれを未だ保持しているアラビア語を例に取り、そこで格語尾が果たす機能について検討しなおした。その結果、アラビア語の格語尾は文内部における名詞句の機能を一義的に決定するわけではないことを示した。いわゆる対格語尾といわれる -an を例に取ると、

- |                         |                              |
|-------------------------|------------------------------|
| 1) <i>qatala zaidan</i> | 彼はザイドを(zaidan)殺した(qatala)。   |
| 2) <i>kāna malikan</i>  | 彼は王(malikan) だった(kāna)。      |
| 3) <i>qatala lajlan</i> | 彼は夜中に(lajlan)人殺しをした(qatala)。 |

1)のzaidanは動詞qatalaの目的語、2)のmalikan はこの文の述部名詞であり、3)のlajlanはいわゆる時の副詞句として機能している。これらの文はいずれも基本語幹の完了形動詞+名詞-an という形式を持っている点では同一であるが、その統語構造はみな異なっている。ここで語尾-an を伴う名詞の統語的機能を決定づけるのは語尾が単独においてではな

く、むしろ語尾とそれが関係する名詞の意味との相互作用によってであることを彼は示した。そのため彼によれば統語構造について語る際にnominative, accusativeという用語を用いるのは好ましいことではない。

ここで'et'の問題に再び目を転じると、彼はそれが付加される名詞句が文中で果たす役割について次のように述べる。

In this it behaves in the same way as prepositions. In the sentences hrg 'jš' and 'md pth', the nominal forms 'jš' and 'pth', for example, play their own rôle either as complement to the verbal form, or as determinative to the subject enclosed in the verbal form. But in sentences such as hrg 't-h' jš' and 'md bpth' the rôle of complement to a verbal form in the sentence is fulfilled by the combinations 't-h' jš' and 'bpth', not by 't' and 'b' only. Nominal forms can play their own rôle within the sentence structure (this could be substantiated by several other examples) but a particle like 't' or a preposition like 'b' never can. (p.10)

ここでは'et'は常に後続名詞との結合においてのみ文内での独自の機能を果たすことができ、その統語的ふるまいは前置詞のそれと類似したものであることが指摘されている。この論文自体は'et'を一貫して小辞particleとして言及し、他の前置詞とは区別しているものの、前置詞との統語機能の類似性の指摘は重要であるように思われる。

議論の詳細はここでの関心事ではないので省略するが、彼の結論によれば格表示を保持しているセム語における対格accusativeと、ここでの'et'句（彼の言う 't' syntagme）との用法は同じではない。対格名詞が上の例文のように多様な機能で用いられ得るのに対し、't' syntagme の機能は一義的にある種の動詞文（伝統的な用語でいう他動詞文）での目的語に使用が限定されている。これ以前の研究において'et'はnota accusativi と呼ばれ対格表示と同一視されてきたが、対格語尾が失われた後、その機能を全て'et'が引き継いだわけではないことがここでは明らかである。そのため彼はこの小辞の記述に際してaccusativeの概念を用いることは適切でないと主張している。

## 5.

Hoftijzer 以降もこの小辞を文法関係の側面からとらえ直そうとする試みは引き続き行われた。Andersen(1971)は、特に動詞yāladを取り上げ、受動文において主語が'et'を伴う例を分析している。彼は他動詞文における目的語の標識（'et'）が受動文の主語となっても引き続き保たれることを能格現象の観点から検討し、ヘブライ語に能格現象が存在した可能性を示唆している。しかしこの場合、典型的な他動詞文（例えば「殺す」「砕く」などの意味の動詞を持つ文）においてさえ特に能格の形式が存在するわけではない上、多くの能格言語での絶対格absolutive case がここでは有標の形式（'et'句）を取ることに

なるなど、少なくとも典型的な能格構文の立場からは疑問点も多く、この見解は今日広く支持されるまでには到っていないようである。

## 6.

これ以外にも多くの研究が著されているが、最近の研究はみな上記のいずれかの研究の成果を下敷きにしたものとなっている。例えばMuraoka(1985) はそれまでの研究が 'et の付加された要素の分析のみに集中しており、逆に限定された目的語が 'et を取らない例を視野に収めていなかった点を指摘、独自の分析を行っている。'et の機能に関して彼の関心は、(1)それが主語とともに用いられ得るかどうか、(2)それに強調の機能を（その後続名詞がどのような統語機能を持っているかにかかわらず）認めうるかどうか、の2点に集中しているが、結論としてはこれらの問いのいずれにも否定的である。ここでは「強調」という概念そのものが考察の対象となっている点が他の研究と大いに異なっており、それまで無批判に強調という概念が使用され過ぎたことが再三強調されている。彼自身は 'et に全く強調のニュアンスを認めていないわけではないが、それが目的語表示としての用例を含めた全ての用例の説明原理として有効であるとはみなしていない。

逆にWaltke & O'Connor(1990) などは、Wilson(1890) の見解などを引用した上で、これを emphatic particle とみなすのがもっとも実例に即しているとする見方を取っている。

このように、格関係の表示と強調との関係をめぐって、いまなお意見の一致をみているとは言い難い状態が続いている。

## 7.

以上包括的というにはあまりに程遠く、これ以外にも多くの重要な研究があるものの、主な研究だけでも年代順に取り上げてみた。ここからいくつかのポイントが指摘できるように思われる。まず、語源の問題をここでどのようにリンクさせるか、という問題であるが、アラビア語の īyyā などの対応語が他のセム語にも指摘されてはいるものの、'et 自体はその文法標識としての成立過程をヘブライ語内部であとづけることがほとんど不可能であり、諸文献での記述も推測の域を出ていないことは記憶しておくべきと思われる。推定に基づいた語源及び機能を根幹に据えた分析はある意味で危険である。また古典ヘブライ語以降の、例えばミシュナのヘブライ語に見られる諸特徴との比較についても、語源の問題とは切り離して慎重に行う必要がある。

また、主語に付加された少数の用例があることから、その他の圧倒的大多数の用例に見られる目的語表示としての機能そのものを否定してしまっているのか、という問題もある。強調説の支持者は修正や目的語表示への再解釈などの手続きを取ろうとしないが、現にテキストの修正が必要とされる事例は多く、この場合も可能性を考えてみる必要はあるだろう。大切なのは修正などの手続きを恣意的に援用しないことである。

また、すでにMuraoka(1985)などが再三指摘している通り、強調という概念そのものが全く掘り下げられることなく無批判に用いられ過ぎていることも覚えておく必要があるだろう。Walker(1955)などはこれを話者の関心の焦点とみなしているようであるが、そうであればこれは文の統語構造と直接の関係はなく、むしろ談話論的な、情報構造との関連が指摘できるはずである。強いて言えば属格名詞や副詞句や前置詞句、さらには名詞文においてさえ 'et が付加しうることになるだろう。しかし現実には 'et は動詞の目的語に付加される例が大部分であり、一部主語がそれを取りうるにすぎない。このように、動詞文において動詞と直接の支配関係にある要素にしか 'et が付加されないというのはとても重要なことであるように思われるのだが、Hoftijzer を除いてそのことにあまり関心を払おうとしないのはなぜなのだろうか。また、名詞句の限定性と強調との関係についてもほとんど自明のこのように思われているが、その関係を明快に表した考察もあまりみない。

また、用語の問題もある。Wilson(1890)の説の検討の際指摘した通り、対格accusativeは形態論的な概念であり、そこでは格表示の存在が前提とされている。一方主語subjectや目的語objectなどは、動作の仕手や受け手といった意味役割的な概念なのか、それとも文法関係に基づく概念なのかが明らかでない研究が見受けられる。特に受動文の問題が絡んでいる以上、意味役割と文法関係とは明確に区別しておくことが絶対に必要である。これについてはすでにSchweizer(1975)が、すでに対格Akkusativと対象語Objektの概念に一对一の対応がないこと、表現のレベルAusdrucksebeneと意味のレベルInhaltsebeneは別個に扱う必要があることなどを指摘しているが、その上でさらに文法関係との関連を検討していく必要があるだろう。これについては類型論の立場からのComrie(1984)や角田(1991)の研究などが示唆的である。もしこれらの研究に習うならば、objectはsubjectと並んで文法関係に基づく概念とし、行為の対象としての意味役割的な概念に関しては動作対象や被動者patientといった用語をあてた方がよいであろう。そのように概念を区別したからといって、必ずしも 'et の全ての用例がうまく説明できるようになるというわけではないであろうが、少なくともそれによりこれまでの研究における異なるレベルの概念や用語の混同といった問題は避けられるのではないだろうか。

最後に、すでにHoftijzer(1965)なども指摘している通り、'et は統語的にはあたかも前置詞であるかのようにふるまっている。それにもかかわらず 'et が前置詞として記述されることはほとんどなく、どの研究でも一貫して対格表示accusative markerとか目的語表示object markerなどとして記述されている。これは理由のないことではなく、動詞の目的語が 'et の有無にかかわりなく目的語としての立場において同等であるとすれば、片方を前置詞句として記述することによってかえって記述が一貫性を欠くことになる、という判断が働いているものとみられる。これは英語やドイツ語などのようなヨーロッパ語において、動詞の被支配項における前置詞の有無が様々な文法現象(例えば受動化など)にとって重要であることを考えれば容易に納得がいく<sup>7)</sup>。一方、Muraoka(1979)によれば、

例えば英語などと異なってヘブライ語での動詞と前置詞との結合関係はそれほど強くないという。そのため英語で come by = obtain, take off = imitate, take in = deceive といったように動詞と前置詞が不可分に結びついて一つのまとまった意味（つまり、動詞の意味と前置詞の意味をつなぎあわせても引き出すことのできない全く別の意味）を表したりするというのがヘブライ語では起こりにくい。さらに、英語では John looked after the child. を受動化して The child was looked after by John. という文を作ることができるが、ここで見られる look after という動詞—前置詞の結合が受動文においても保持されるという現象はヘブライ語では決して起こりえない。逆にヘブライ語では 'ēṭ に限らず前置詞が受動文においてしばしば削除されてしまう。次の例は Muraoka (1979) からの引用である。(p.433)

4) 'āzartī layyeled 私はその子供を (layyeled) 手伝った ('āzartī)。

5) ne'ēzar hayyeled その子供は (hayyeled) 手伝いを受けた (ne'ēzar)。

ここで受益者をあらわす前置詞 l<sup>e</sup>- は受動文では削除されている。もっともこれは義務的ではなく、次の動詞 sālah<sup>B)</sup> の例では受動語幹においても前置詞は保持されている。

6) wesālahtā l<sup>e</sup>'ammekā そしてあなたはその民を (l<sup>e</sup>'ammekā) 許す。(1K. 8:50)

7) wenislah lāhem そして彼らは (lāhem) 許される。(Lv. 4:20)

これを考慮すれば、特に 'ēṭ のみを他から切り離して特別扱いする理由はないようにも思われる。そのため、いわゆる動詞の目的語を形式的に分類しようとする場合、これまでよりも目的語の概念を若干広く取って、以下のように無標の目的語と有標の目的語に分けることも可能なのではなかろうか。

[A]	object	{	$\phi - NP_{\text{indet}}$	}	bare object	[B]
			$\phi - NP_{\text{det}}$			
			<u>'ēṭ</u> - $NP_{\text{det}}$			
	prepositional phrase	{	<u>b<sup>e</sup></u> - NP	}	prepositional object	
			<u>l<sup>e</sup></u> - NP			
			.			
			.			
		.				

これまではAのように分類されてきたが、Bのような分類も同じように可能であるように思われる。最も bare object 並びに prepositional object は Muraoka (1979) の術語であるが、彼自身は 'ēṭ 句を bare object の方に分類しているので、ここでの用語の使い方は彼のものと同じではない。どのように呼ぶにせよ、ここでは 'ēṭ は、少なくとも動詞との関係に関する限り、他の前置詞句と同等に扱いうることとなる。ただ前置詞句は 'ēṭ 句と異なり、動詞との結合以外でも用いられうるため、動詞目的語の一種とみなすか、独立した文修飾語句のようにみなすかの境目があいまいになる危険がある。そのためこの枠組みも



これだけでは不十分なものといわざるを得ないが、少なくともこれまでは動詞との支配関係において、'et句以外の前置詞句がともすれば軽視されがちであったことは確かなことと思われるので、これからはこれらも含めたより広い視野からの考察が必要となるのではないと思われる。

注

- 1) 「対格表示」nota accusativi が一般的であるが、Schweizer(1975) には「目的語表示」nota objectiの用語もみえる(p.135)。
- 2) Wilson(1890)は 'et'の用法を次の7つに集約している。1) the Accusative of the Direct Object; 2) the Nominative Absolute; 3) the Accusative of Subordination; 4) the Accusative depending upon a verb to be supplied; 5) the Adverbial Accusative; 6) the Accusative as the object of a passive verb; and 7) the Accusative as the subject of (1)Passive verbs, and (2)Intransitive or Neuter verbs. このうち2)は今日いうCasus Pendens のことである。これを除いた全ての用法において彼はAccusativeの用語を用いている。
- 3) なぜなら動詞の後ろではすでに語順によって動詞との支配関係が明らかであるから、あえて目的語であることを表示する必要がない、というのがその理由である。これは明らかにアラビア語の iyyā を念頭に置いた記述であるが、しかし、これが言えるためにはヘブライ語で語順が文法関係を表示する重要なカテゴリーとしてすでに固定されている必要がある。
- 4) 彼は中世ラテン語 legitur Virgilium. や、イタリア語 si compra, si vende mobili. など为例としてあげている。前者の場合、古典期の legitur Virgilius. とならんで中世に導入されたconstruction hybrideであって、'on lit Virgile.' の意味だという。
- 5) 彼によれば、上記のJoüon(1923) のあげたラテン語やイタリア語以外にも、同様の構文がケルト語や'neuindische Dialekte'においてみられるという。
- 6) この反論に対し、Blau(1956)自身、主格表示の機能を認めるには出現数があまりにも少ないことを重ねて指摘した(わずか2ページの)再反論を後に行っている。
- 7) もっともトルコ語などにおいても対格語尾はヘブライ語と類似して定の目的語にのみ付加しうる。次例参照。(Comrie(1989), 日本語版p.142)
- 8) Hasan öküz-ü aldı. ハサンは牛を買った。  
ハサン 牛 対格 買った
- 9) Hasan bir öküz aldı. ハサンは一頭の牛を買った。  
ハサン 一つの 牛 買った
- 8) 動詞 sālāḥ (許す) の場合、前置詞 l<sup>e</sup>-の後に関手の人間が来る構文と、相手の罪が来る構文の二つがある。ここでは前者の例をあげておいた。

## 参考文献

- Albrecht, K. (1929). '  $\text{לְךָ}$  vor dem Nominativ und beim Passiv.' Zeitschrift für die Alttestamentliche Wissenschaft (ZAW). Vol.47, pp.274 ~284.
- Andersen, F. I. (1971). 'Passive and Ergative in Hebrew.' Albright Festschrift. pp.1~15.
- Blau, J. (1954). 'Zum angeblichen Gebrauch von  $\text{לְךָ}$  vor dem Nominativ.' Vetus Testamentum (VT). Vol.4, pp.7~19.
- Blau, J. (1956). 'Gibt es ein emphatisches 'ET im Bibelhebräisch?' VT. Vol.6, pp. 211 ~212.
- Brockelmann, C. (1931). 'Die Objektkonstruktion der Passiva im Hebräischen.' ZAW. Vol.49, pp.147 ~149.
- Comrie, B. (1989). Language Universals and Linguistic Typology. Basil Blackwell.  
〔本文は日本語版(1992)『言語普遍性と言語類型論』松本克己・山本秀樹訳 ひつじ書房によった。〕
- Fischer, W. (1987). Grammatik des klassischen Arabisch. Otto Harrassowitz.
- Gesenius-Kautzsch (1910). Gesenius' Hebrew Grammar. Oxford Univ. Press.
- Hoftijzer, J. (1965). 'Remarks concerning the Use of the Particle 'T in Classical Hebrew.' Oudtestamentische Studiën. Vol.14, pp.1~99.
- Joüon, P. (1923). Grammaire de l'hébreu biblique. Institut Biblique Pontifical.
- MacDonald, J. (1964). 'The Particle  $\text{לְךָ}$  in Classical Hebrew: Some New Data on its Use with the Nominative.' VT. Vol.14, pp.264~275.
- Muraoka, T. (1979). 'On Verb Complementation in Biblical Hebrew.' VT. Vol.29, pp. 425 ~435.
- Muraoka, T. (1985). Emphatic Words and Structures in Biblical Hebrew. The Magnes Press.
- Saydon, P. P. (1964). 'Meanings and Uses of the Particle  $\text{לְךָ}$  .' VT. Vol.14, pp. 192 ~210.
- Schweizer, H. (1975). 'Was ist ein Akkusativ?' ZAW. Vol.87, pp. 133~146.
- 角田太作 (1991). 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- Walker, N. (1955). 'Concerning the Function of 'ETH.' VT. Vol.5, pp.314~315.
- Waltke, B.K. & M. O'Connor (1990). An Introduction to Biblical Hebrew Syntax. Eisenbrauns.
- Wilson, A.M. (1890). 'The Particle  $\text{לְךָ}$  in Hebrew. I & II.' Hebraica. Vol.6, pp.139~150. 213~224.